本色教會に就いて

宮川尚志

本色教會とは外國における宗教團體の經濟的援助や布教上の指導を受けずに、支那本國人自身の力と意思とにより經營し傳道する獨立教會、文字通りに支那自らの色彩をもつキリスト教會のことである。*

この語を耳にしたのは昨年八月、上海で新教關係の調査に當つてゐられる特務機關の鈴木氏にお會ひした時のことである。大東亞戰開始以後、カトックは姑くおき新教々會は英米本國との連絡を絶たれ、否應なしに支那人信徒自らの經營によらねばならなくなつた。もつとも民國成立以來國權回復運動の一のあらはれとして外人宣教師に左右されてゐる高等教育を支那人の手に取り戻さうとする意圖は反キリスト教運動の有力な支柱となつてゐた。國際情勢が東亞を中心として一變した今日、本色教會運動は新たなる眼を以て見直されねばならない。

しかし私の關心を特に呼び起したのは、一般に支那民族の外來宗教受容の仕方に對する歴史的考察に關係づけてこの問題を一層根柢的に取扱つてみることの意義である。

種族生活の內部に胚胎した宗教思想は社會發達の一定の段階に達すると、ある種の諸民族においては時空を隔ててゐても呼應するが如き宗教的天才が出現し、その創意と體驗とにより普遍的な人類救濟の旗幟を掲げた組織的宗教の下に止揚せられ、かくて成立した教團の活動は幾山河を越えて、他種族の生活圏に作用し、自らの中に宗教的天才を出さないまゝにきた種族はかゝる外來宗教と接觸し、あらゆる葛藤を經過し何等かの形でこれを攝取するに終るのが通例である。

外來宗教受容の當初においては、これを拒否せんとする意識的態度や無意識的傾向が、受容する民族の側に起り宗教迫害となつて現れる。しかも民族生活內部の矛盾・不統一或は自らの文化の缺陷を反省して、宗教が伴ひ來つた外來文化の優秀を認識しこれを學び取らうとする民族的欲求は、民族社會の一隅に外來宗教を憩はしめるのを常とする。しかしなほこの程度にありてはその宗教は異國的色彩の勝つた、信仰の本質よりはその周邊の宗教的文化の魅力をたのみとして、在來の民族文化の花束に一枝を添へる位の役割しか果さ

ない。また時にはその宗教の傳道は背後に政治的折衝や武力を有し、布教は侵略の、假面を被つた先導にすぎぬ場合もある。キリスト教について云へば明末清初及びそれ以前の支那流傳の仕方は前者の例であり、南京條約以後清朝末期に至るいはゞ教案續發時代は後者の例である。

しかし若しその宗教にして絶對の眞理の一面を有しその民族にとつて不可缺の精神的要素を與へうべきものがあるならば、その發祥と弘通の過去において特殊な民族又は諸民族の傳統によつて刻印された被制約性を脱し、普遍的な姿を保ち乍ら、新らしく自らをその中に展開すべき民族の未來に向つて進む生活の推進力となるために、かへつてその民族の傳統に隨應し、かくて普遍的宗教としてしかも歴史性を獲得するに至るものである。

一般的にいつて、ある宗教がある民族の中にその本色教會を樹立しうるや否やは、その宗教がそこに受容されうるや否やを決すべき準的といふべきである。また民族は本色教會を成立せしめずして外來宗教をわがものとすることはできない。

しからば支那においてはどうであつたか。これに答へるべき私の知見はあまりにも狹い。しかし會々キリスト教の現勢に關して本色教會なる概念を把握し、これを專攻する中世の歴史に訴へるならば、佛教の支那東傳史上において佛教が支那人のもの、支那人のためのものになりながら佛教本來の面目を保つた時機は東晋中期、道安・慧遠の教團成立にありと言明せざるを得ない。

こゝに判り易い一の例を引くと、漢人沙門がその外國人の師匠の姓即ち、安息國人は安、龜茲國人は帛といふが如き――に依らず、一樣に釋姓を稱するに至つたのは道安の提唱によるといふのが通說である。

初魏晋沙門依師爲姓。故姓各不同。安以爲大師之本。莫尊釋迦。乃以釋命氏。後獲增一阿含。果稱四河入海。無復河名。四姓爲沙門。皆稱釋種。既懸與經符。遂爲永式。（高僧傳卷五）

こゝにおいて支那佛教徒は西域各國の出身の夫々の傳道沙門を師とする各派の佛教の差別制限をこえて、それらが何れも釋迦一佛の教であることを自覺した。道安らが從來老莊思想を媒介としたため、往々般若經の眞意を離れた格義を排斥し、三論傳譯以前によくこれと符契を合する空の解釋たる本無義を立てたこと等を併せ考へて、彼により佛教が外國系の色彩を脱却すると共に佛教本來の面目を發揮したと云ひうる。しかもその佛教は支那民族の荷ふ所のそれであり、支那人沙門を通じて支那の傳統的文化の流れの中に、また彼等

を理解し尊信し援助した帝室や中世貴族の精神生活の中に攝受されて行つたのである。道安らの精神、即ち時代や徑路を異にし所依の經論を異にした雜多なる復數の佛教をいかにして一の體系ある佛教に組織し直すかゞ支那人に課せられた課題であり、三論・天台・華嚴の學匠の拂つた努力は佛教の支那化ではなくて佛教自體の展開に捧げられ、つひにこれを成功せしめたのである。** 佛教が支那人の精神に何等の刻印をおさずして近世の頽落狀態に陷つたとは私にとつて信ずる能はざる所である。

回教については如何。回教史について殆んど何等知る所のない私にとつて十分な斷言は下しかねるけれども、明末清初の回儒の努力は回教自體の正しい認識と共にその教團生活の支那化に向けられたと思はれる。

即ち王岱輿・劉智・金北高らの著述を見ると、佛教・老莊思想を斥けながら、儒教の說く主德たる孝を、回教教義により深く基礎づけようと試みてをり、一方彼等は政治的迫害に屈せず信仰を堅守すべしと回民に對して諭してゐる。王岱輿の正教眞詮の中に大舜が告げずして娶つたといふ古傳に對する孟子の議論を批判し子孫がないといふのは不孝の徵表にはならないが、舜はその父が自分の妻妾にもし同意しない場合は、天子たる堯が二女をおさめくださんとしてゐる君意に違背し、君意に違背すれば不忠の罪を自分の父母に加へる結果を來し父母を不忠ならしめるのは即ち自分の不孝であるから、忠孝兩全のために告げずして娶つたのであると解釋し、たくみに儒教倫理に反省を加へしめると共に回教をして近世支那の國家及び家族生活に適合せしめたのである。淸代の回教書指南要言に眞主の諭として、「爾二親に順はば、二親是外道なりといへども、恕宥を允し予へん」といふ句があるが、支那倫理との調和については回儒は中世佛教徒よりも積極的であつたと思はれる。*** しかし回民が特殊の信仰・風俗を固守し、支那の中に在つても同時に回教圈に屬してゐるともいふべき狀態と、回教徒中の知識分子の教說とが、いかに對應すべきであるか、隨つて回教が本質を失はずに全く支那的になつたかどうかについては更に考察を要すると思はれる。

最後にこの考察の出發點になつたキリスト教について述べる。本色教會運動は明かに義和團事件によつて伸長すべき衝擊を與へられたと思ふ。即ち從來のごとく外國勢力をかりて支那固有の文化を無視し傳道を試みても過大な根强い反抗にあふのみであるから、支那人の創意を重んじ、何等かの意味で支那人に適する樣な布教方針をとらねばならないといふ反省が內外の傳道者の中に起つたのであらう。

民國十七年出版、中華基督教會年鑑第十期に、董健吾「本色教會之新發展」といふ一文が收められてゐる。** その要旨は本色教會の發展のためには不平等條約上の保護傳教の權利を漸次放棄し、在華布道の經費を逐次減少する必要があるとなし、ついで當時著しかつた本色化の諸傾向を述べ、教會の儀式に國樂を奏し新歌を唱へ（上海における王治心の中華基督教徒新園契）又は佛教の儀式をまじへる（南京に於ける支香德の基督教叢林）等の儀式上の變遷、教會建築を寺殿式にすること、教會内の宗教畫を支那畫風により描くこと、西洋文の飜譯ではなく支那人信徒による基督化的文學を創ることなどを列擧してゐる。

かゝる意味の本色化、支那化は佛教や回教においては流傳の初期から見られるところであり、キリスト教の場合も、明末耶蘇會士の布教方針など全くこれと同樣である。しかし、最初に論じた如く本色教會の成立を宗教移植の過程において到達すべき――可能態に止まるか實現され得たかは別として――成果と考へるときは、現代キリスト教については何等自分は回答を與へることはできない。昨年現地各方面から聞いた意見では概ね否定に傾いてゐる。また支那傳道は失敗であつたといふ反省は早くから教會内部で起つてゐる。もつともこれは主として新教について論ぜられたのであつて、既に數世紀の歴史を有し支那人には天主教とよばれ基督教（新教）と明瞭に區別されてゐるカトリック教會については別途に考察されねばならない。

何れにしても本色教會の成立はその教會の布教すべき範域以外に存在するその教團の形而下的勢力、ことにそれと結合した政治軍事的勢力から絶縁された時でも、能くその教線を維持し、その精神を失はないかどうかといふ事實に照して決せらるべきである。支那傳道にいかなる意味の强力をも伴はなかつた佛教についていへば、かつて佛教は支那において本色教會を成立せしめたと肯定できると思ふ。回教及びキリスト教に關してこの問題はなほ未解決としておいた方が愼重であらう。

* 王治心「中國宗教思想史大綱」第六章にも少しく本色教會のことに觸れてゐる。

** この條の記述については塚本善隆氏の諸著作、特に魏晉佛教の展開（支那佛教史研究北魏篇所收）を參照。

*** 釋契嵩輔教篇の孝論に見るごとく、孝を孝行と孝義とに分ち、佛教は形式の孝に違ふとも孝の精神をより深く把握してゐると辯論するか、又は經典中の文句を引用し、佛教にも孝を說かないのではないと主張し、一般に儒教側の非難に對して守勢的である。

**** この書は上海で繆秋筌氏から贈られた。氏は本色教會に關する私の質問に答へ、希望を持つけれども時期は早すぎるとの意見であつた。